様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年 １２ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４０９１

研究課題名（和文）常習性災害と一回性災害の経験知の伝承・継承をめぐる社会学的研究

研究課題名（英文）A Sociological Study of Passing on Lessons and Memories on the Natural Disasters and Man-made Disasters.

研究代表者
植田　今日子（UEDA, Kyoko）

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：７０５８２９３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は「常習性の災害」と「一回性の災害」の伝承のあり方について比較考察した。考察の結果、災害伝承は再来の確信次第によって増減・多様化し、災害文化の形成に作用することが明らかとなった。特に1960年のチリ地震津波を「一回性の災害」として被災した沖縄県名護市では、三陸地方のようにその後の再来に備えるような災害文化の醸成はみられなかった。しかし福島第一原発事故を「一回性の災害」として被災した福島県飯舘村、葛尾村の畜産農家らは、彼らの畜産文化が災害文化をむしろ包括するかのように被災状況を克服した。つまり、日々の畜産農家間の共助が原発事故発災時から避難生活中の畜産を6年もの間可能としていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　通常、原発事故や戦争といった一回性の激甚な「災い」は、地域社会の力で太刀打ちできる類いの出来事として扱われない。原発事故や戦争は、地域社会を媒体とするよりは、資料館や博物館を介して、より広義の「後世」に伝承していくことがイメージされる。けれども本研究の特色としては、「一回性の災害」も「常習性の災害」と同様に一定の空間的限定性の中で、かつて現地で平穏に暮らしていた人びとの具体的な文脈のなかで継承されるための可能性を問うている。

研究成果の概要（英文）：This research compared the traditions of disaster memories and disaster prevention in both disaster prone areas and the areas otherwise. It became clear that the disaster traditions increase or decrease and diversify depending on the prospects of its return, which affects the formation of disaster culture. In Nago City, Okinawa Prefecture, which was damaged by the 1960 Chile earthquake and tsunami as a "one-time disaster," unlike the Sanriku region, there was no fostering of a disaster culture to prepare for the subsequent return.

However, the livestock farmers in Iitate and Katsurao villages in Fukushima prefecture, which were affected by the Fukushima Daiichi nuclear accident as a "one-time disaster", overcame the disaster situation as if their livestock culture rather included the disaster culture. In other words, daily mutual assistance between livestock farmers enabled livestock farming during the evacuation life for six years from the time of the nuclear accident.

研究分野：社会学、民俗学

キーワード：災害　原発事故　放射能　畜産農家　全村避難　伝承媒体　生業

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景：

応募申請時の研究の背景および動機としては、「一回性の災害」と「常習性の災害」の伝承の困難さに、どのような異質さがあるのかを明らかにしようとしていた。というのも「常習性の災害」に比して、「一回性の災害」や戦争などの災いは、伝承者・継承者が必ずしも明確ではないという困難を孕んでいるからである。地域社会が伝承の媒体となることは同様であっても、地域社会に生じた亀裂やその影響力の大きさ、広がりによって、伝承が滞ったり遮られたりすることがある。また過去の公害などにも見られたように、被害をどのように語るべきかをめぐって、長らく憂慮することも生じることが考えられる。また、人災と天災の違いが、地域社会を媒体とする伝承に、どのような違いをもたらすのかということも問われなければならないだろう。

通常、原発事故や戦争といった一回性の激甚な災いは、地域社会の力で太刀打ちできる類いの出来事として扱われない。第二次世界大戦で地上戦を経験した沖縄県を例にしても、戦争などの災いは、地域社会を媒体として後世に伝承していくよりは、博物館を介して地域的括りを超えた広義の「後世」に伝承し、広く県民ないしは国民が継承していくことがイメージされる。けれどもこの研究は、《一回性の災害》も《常習性の災害》と同様に、そこでかつて平穏に暮らしていた人びとの具象的な文脈のなかで継承される可能性を問うている。その理由は、空間的限定性をもたない継承が、抽象化や脱文脈化を免れず、誰もが「まさか自分の身に降りかかることはない」 と信じる事態に陥ってしまうからである。本研究の独創性としては、一回性の災害の一回性を疑い、再来に備える力を養えるような日常の歴史の継承を重視していた。

２．研究の目的

本研究の目的は、地域社会が自然災害や人為災害を経ることで培った経験知(indigenous knowledge)が、具体的な生活空間を媒体として(1)どのように後世に効力を発揮するかたちで《継承》されうるのか、同時に(2)後世に意味を成すことなく《無効化》してしまうのか、双方の条件を明らかにすることである。この研究で比較する自然災害と人為災害は、対照的な性格をもっている。具体的にいうと、ひとつは常習性をもつ自然災害といえる津波であり、生業(漁業・農業)に大きな影響を及ぼす性格の災害である。そのため、災害への備え(適応策)が一定程度地域社会に蓄積され、経験知が試行されながら継承される可能性をもつといえる。

もうひとつは一回性の激甚な人為災害(2011 年の福島第一原発事故に附随する環境破壊と汚染)である。2011 年の原発事故以降、放射線量の高い 5 町 2 村では全町避難、全村避難の指示がでている(冨岡町、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯舘村、楢葉町[2015 年 9 月 5 日解除]2015 年 10 月研究計画申請時点)。

日本史上前例のない規模の放射能災害であり、同時に広い範囲で地域社会そのものが退去を要請されている。そのため、この稀有な経験に培われたはずの経験知が、極めて継承の困難な状況にあるといっていいだろう。具体的には、そこでどのような日常生活が営まれており、原発事故はどのようにやってきて、どのように人びとに生業を失わせたのか、どのような地域資源を損ない、どれほどの組織や関係性を成立させなくしたのか、各地の多彩な生業形態や暮らしから浮かび上がる経験知の行く宛が問われている。先行の研究においても、各地域社会の生活空間の特質が、常習的な災害を後世に知らせることに大きな役割を果たしていることが報告されている(北原 2001,川島 2011)。 やむをえないことではあるが、放射能汚染地域の空白(無人)化は、この災害を繰り返さないために伝承・継承できるはずの知見を、積極的に雲散霧消させてしまうだろう。そこで本研究では、飯舘村・葛尾村の平成 29 年 3 月(予定)の避難解除以降の帰村者の経過をたどりながら、人びとが経験知を醸成させていく過程と、その伝承・継承のあり方を現在進行形の災害史として把握してみたい。

そこで本研究では、常習性と一回性の災害の質的差異に注目しながら《経験知を有意義に継承可能にする創意》とその《伝承・継承の困難さ》の双方を明らかにすることを狙いとした。

３．研究の方法

本研究の調査地は、一回性の災害の調査地として、福島県飯舘村、葛尾村（福島第一原発事故被災地）、沖縄県屋我地島（チリ地震津波）糸満市、那覇市、名護市、国頭村、伊江村（沖縄戦）、そして常習性の災害の調査地として宮城県気仙沼市唐桑町、仙台市（東日本大震災およびそれ以前の記録的津波：明治三陸大津波、昭和三陸大津波、チリ地震津波）である。

データ収集の方法は、主に行政や畜産組合などの統計、県史、市町村史などの地方誌および地方紙データアーカイブの資料収集を行った。また一回性の災害（原発事故・沖縄戦）のデータ収集としては、福島県の計画的避難区域の住民の方々（飯舘村、葛尾村）へのヒアリング、および沖縄県で資料館学芸員や記録編纂に従事する方々、語り部として従事する方々等、各種の戦争経験の継承者、伝承者の方々にヒアリングを行い、県史や市町村史、字誌、その他の行政資料、また沖縄県公文書館収蔵の資料を参照した。また沖縄県（屋我地島）でのチリ地震津波の被災記録についても、同館資料および沖縄県立図書館所蔵の地方紙の記録を参照した。

また屋我地島の愛楽園においても自治会長や職員にヒアリングを行い、チリ地震津波で流失した橋（屋我地大橋）の経緯についてお話を伺い、参照すべき資料についてご助言頂いた。

４．研究成果

「一回性の災害」と「常習性の災害」との比較研究によって導かれたのは、災害経験の有意義な継承には、批判的継承を可能とし、なおかつ継続的に有効な「伝承媒体」を必要とするということであった。ここでいう伝承媒体とは、大きくは二つに分けられる。ひとつは、それが災害・災禍の伝承の媒体となることが意図されているもの(「意図的媒体」)。もうひとつは、意図せざる結果として媒体となっているものである(「意図せざる媒体」)。この二つのカテゴリーは人為災害、自然災害如何によって決まるものではない。なお、本研究では常習性の人為災害(火事など)は対象として扱わなかったため、以下の表からは除外している。

災害の認識	災害種別	伝承媒体	例
常習性の災害	自然災害	意図的媒体	(津波・地震)記念碑、資料館、語り部および伝承のための各種の組織体、
		意図せざる媒体	(地震・津波の)痕跡、痕跡を留める有形無形のもの、生活者の記憶
一回性の災害	自然災害	意図的媒体	記念碑、資料館、
		意図せざる媒体	生活者の記憶
	人為災害	意図的媒体	記念碑、資料館、語り部および伝承のための各種の組織体、生活者の記憶
		意図せざる媒体	避難しながらも継続した生業、祭礼、民俗行事、習俗、生活者の記憶

本研究が調査対象とした常習性の自然災害である津波および地震の伝承媒体としては、図にあげたような「意図的媒体」が非常に豊富であり、また伝承の意志も総じて高く共有されていた。また同様に「意図せざる媒体」としての地震・津波の痕跡も、津波が打ち上げた大きな石や津波水位の痕跡、また被害の大きかった場所の住宅遺構の保存、犠牲者の多かった小学校、被害のあった防災庁舎(保存は協議中)など、多くの形態がある。

常習性の災害と一回性の災害の伝承媒体の「意図的媒体」には、大きな違いは見られない。しかし再来への警戒度に比例するように、それらの数や規模、形態の多様さには大きな差異がある。例えば同一のチリ地震津波(1960 年)で比較すれば、宮城県や岩手県の三陸地方では「常習性の災害」と受け止められているが、沖縄県名護市では「一回性の災害」として受け止められている。

特に両地点の伝承媒体で、「意図的媒体」および「意図せざる媒体」で、大きな違いが見られた。チリ地震津波が襲ったかつての沖縄県名護市の被災地では、石碑が残されていたものの、特にそれも目立つことはない。石碑の他には特に津波に特化した資料館や博物館なども存在していない。かつて津波で屋我地大橋が流失したことを記憶している人は健在(生活者の記憶)だが、市史や字誌などに記載されるのみである。これは当地でこの自然災害(津波)が「一回性の災害」であることの証左でもあり、今後再来がないと信じられていることが明らかだといえる。それに比して三陸地方の津波常習地では、再来への確信が非常に高いため、「意図的媒体」と「意図せざる媒体」の両方において非常に豊富であり、形態も多岐にわたる。すでに東日本大震災の発災前から「常習的災害」である津波については、伝承媒体は多岐にわたって存在している。また伝承媒体だけにとどまらず、津波到達時への備えや避難訓練なども行政のみならず地域生活の細部にわたって行き届き、災害文化の存在はすでに存在したともいえる。しかしながら 2011 年の被災でこれまで経験のなかった被災のありようが、新たに災害伝承に加わっていることが考えられる。さらに新たに保存されつつある災害遺構が、今後の住民にどのような記憶を伝承していくかについては、本研究では検証しきれなかった。

また、本研究の「一回性の災害」(福島第一原発事故)の検証から得られた知見によると、「一回性の災害」と「常習性の災害」の双方において、生業という営みそのものが、「伝承媒体」となっていくということが挙げられる。形のない「伝承媒体」だが、具体的にはそれは「一回性の災害」(福島第一原発事故)の最中に避難しながらも継続した畜産(生業)という営みである。「生業」が災害の伝承媒体であるという指摘は少々唐突かもしれないが、実際に葛尾村や飯舘村(およびその他の被災地域)の畜産農家の方々が、避難を経て(再開の場所がいずれであったにしても)畜産を継続できていなければ、原発事故の詳細な被害の実態や影響そのものが積極的に記憶されなかったということが挙げられる。なぜなら、原発事故直後に家族や仕事の関係でそのまま家畜と離れ離れとなり、家畜を死なせてしまわざるをえなかった方々、家畜を手放さざるをえなかった方々、廃業を余儀なくされた方々など様々な立場の被災者がいる。しかしこのような方々は積極的に被害を語らない、語れないということがあるだろう。したがって避難の経緯や被害の詳細が明るみに出ないということが考えられる。語ってくれる方が現れるにしても、長い時間を待たなければいけないという可能性がある(伝承媒体は常習性、一回性いずれの災害も、長期にわたって語り手を待つ姿勢も求められるだろう)。つまり経験とは記憶

そのものであり、生業が震災を経て、いずれの形態にせよ継続しえることを経て、はじめてその被害の詳細が明らかになるということである。葛尾村・飯舘村の両村では、住民は全村避難を余儀なくされたが、避難解除まで家畜を手放さず飼い続けながら避難期間を乗り切った人たちがいた。廃業した人たちの方が大多数ではあるが、この地で畜産を営むこと自体が、原発事故当時の被害や教訓の知のストックとなっている。それは畜産だけに限らず、津波における漁業もまたそうであろう。「生業」という無形の災害の伝承媒体が秀でている点は、その災害が「どのように」自分たちの生業、つまり生活や生命そのものを脅かすものであるのかがよくわかるということである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 植田今日子	４．巻 25
２．論文標題 原発事故と畜産農家の避難：なぜ「避難」が畜産農家の廃業を招くのか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 環境社会学研究	６．最初と最後の頁 124-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.24779/jpkankyo.25.0_124	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　3件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Kyoko Ueda
２．発表標題 Evacuation for the Livestock Farmers in Fukushima Nuclear Disaster
３．学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2019 Inter-Congress（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyoko Ueda
２．発表標題 How Does Evacuation Cause the End of Livestock Farming?
３．学会等名 7th International Symposium on Environmental Sociology in East Asia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 植田今日子
２．発表標題 「地縁は『構築』できるか」
３．学会等名 現代民俗学会 第46回研究会「現代民俗学は『地域』と『むら』をどう捉えるか：〈共〉の民俗学を考える」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 植田今日子
２．発表標題 被災した海と陸
３．学会等名 2019年度東北社会学研究会大会「現代東北漁村社会への視座」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 植田今日子
２．発表標題 『更地の向こう側』の記憶地図：気仙沼市唐桑町宿での試みから
３．学会等名 跡見学園女子大学地域交流センター「東日本大震災と「記憶」の記録化：試みとしての地域史・写真展・記憶地図・街の復元（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ueda, Kyoko
２．発表標題 Bridging the Islands: A Miracle Tool or Burdensome Legacy?
３．学会等名 19th ISA World Congress of Sociology held by International Sociological Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ueda Kyoko
２．発表標題 A Bridge for an Island: a Solution for Isolation or a Tool of Domination?
３．学会等名 6th International Symposium on Environmental Sociology in East Asia（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 植田今日子
２．発表標題 祭礼の危機と担いのしくみ：架橋後のシマの空間闘争としての祭礼
３．学会等名 第90回 日本社会学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kyoko Ueda
２．発表標題 Can Inexperienced People Transmit the Disaster Memory: Transmission of repeated tsunami to future generations
３．学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter Congress 2016（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 鳥越皓之ほか編　植田今日子ほか著	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 572(85-102)
３．書名 『生活環境主義のコミュニティ分析』所収 植田今日子「離島をやめたシマ」	

１．著者名 植田今日子企画・監修、街からの伝言板プロジェクト編	４．発行年 2017年
２．出版社 ハーベスト社	５．総ページ数 260（5-7，50，101，251-255）
３．書名 街からの伝言板：次の地震に遭う人にどんな伝言を伝えますか	

１．著者名 鳥越皓之、帯谷博明編、植田今日子（分担執筆）	４．発行年 2017年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 199（126-128）
３．書名 「大規模災害とコミュニティの行く末」『よくわかる環境社会学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考